

第十八章

スポーツはルール厳守

「なんだ！ もったいない」

田中が次々と捨てられる弁当やパンなどを見て驚く。

「何ということじゃ」

弁当やパンや牛乳や果物などが種類ごとに破棄されていく映像が何度も繰り返される。どうやらスマートフォンで撮影された動画のようだ。そして女性の声がする。

「こんなことが許されていいのでしょうか。私たちはオリパラのボランティアでした」

今度は男性の声だ。

「無観客になったので急遽ボランティアを大幅に削減した。それなのに弁当を減らすのを忘れていたのでメチャクチャ余ったんだ」

別の声がする。

「違う。業者をかばうためにあえてキャンセルしなかった」

ここで画面が変わる。現れたのはこの画像を送ってきたボランティアなのだろう、ぼかした顔写真とともに怒りの声が流れる。

『別の仕事があるから手伝ってくれ』と俺たちわずかに残ったボランティアに連絡があったので来てみたらこれだ。『手当を出すから極秘に廃棄作業をしてくれ』と頼まれた。まさかこんなことをさせられるなんて」

憤慨していた声がやがて涙声に変わる。

「コロナ禍で職を失った人や恵まれない子供たちになんとか食事をと必死に援助の手を差し伸べる人がいるのに、こんなことが許されるのか。アスリートも苦難を克服して晴れの舞台に出場する。それはいい。でも競技場の裏側でこんなことが行われているとしたら、アスリートはまともに戦うことができるのか。こういう行為自体がスポーツを侮辱していると思う」

ここで山本が現れる。

「私が報道すべきことは何もありません」

山本が涙をこらえてうつむく。驚くと言うより意気消沈した田中が画面の鮮明でない男の顔を見つめながら同情する。

「むなしいな。これじゃ何も残らない」

「残るのは残飯じゃなく……」

大家が言葉を止める。

「残るのはむなしさだけじゃ」

「もはやウイルスとの戦いやアスリートの熱い思いなど何の慰めにもなりません。高い競争率を乗り越えてオリパラ参加の権利を手にしたアスリート、同じくチケットを手に入れた市民。いずれも……ただむなしだけ」

映像が変わる。荒れた土地に種をまいて遠くから水を運んできてひしゃくで芽生えたばかり

の小さな葉にかけているいかにも貧しそうな農民。やがて実を結んだ米や麦や果実を頭を下げ
て受け取る業者。それらが弁当などにしつらえられてオリパラの競技会場に運ばれる予定だっ
た。

はじめから新型コロナウイルスの感染拡大で観客を入れて競技を行うなど無理だったにもか
かわらず開催は強行された。しかも競技場内での飲食も差し支えないと言っていたが、すかさ
ずスポンサーのビール会社が販売自粛を発表すると、それに押されるようにオリパラ組織委員
会も飲食の提供方針を取り下げた。そして結局無観客開催となった。

当然ボランティアの数を大幅に減らすことになった。もともとその前に委員会の対応に不信
感を募らせたボランティアが次々と辞退していた。それでもなんとかオリパラをと願う一部の
ボランティアは踏みとどまったが、この無観客決定でとどめを刺された。

オリパラ組織委員会はボランティア用の弁当やパンなどの供給をすぐさま停止する措置を執
らなかつた。オリパラ競技はある意味スピードを争う競技なのに委員会にはまったくスピード
感がなかつた。もちろん委員会の大半の理事はアスリートだ。

あふれるほど運び込まれた弁当などを残った数少ないボランティアが本来の仕事ではない廃
棄作業に駆り出された。いくらオリパラをなんとか成功に導くために汗をかこうと最後まで残
ったボランティアの堪忍袋の緒がついに切れた。

スマートフォンで撮影された冒頭の動画がすべてを物語っている。アスリートは限界に挑戦

する。それはそれで感動を与える。しかし、それはあくまでも現役のアスリートが競技場で行うことが前提のはず。厳格なルールの中で彼らはギリギリのところまで頑張るのだ。

そういう経験を持った元アスリートでさえも成功体験というものがいかにくせ者かと言うことを忘れてしまう。過去の栄光にしがみつこうとしているのではないだろうが、神輿に乗せられてしまうと自分を失ってしまう。だから一步下がることも心得ている。無理と無茶を区別し絶えず行動してきたはず。

だがオリパラ組織委員会の理事となつてからの判断力や実行力は過去の栄光を汚すほど浅薄なものだった。黒い雲と冷たい風が吹いたらどんなに綿密に計画して準備周到だったとしても、そして中途まで来たとしても登山は中止すべきだ。これが本当の勇氣である。

そうだとすれば弁当などの破棄なんか起こりようがない事件だ。誰が見てもおかしいことをやってしまう。ルール以前の問題だ。

山本の解説が終わる。

「この日の廃棄だけでも数千万円の損失らしいの」

「なんじゃと！」

大家が怒る。田中も金額に驚く。

「大金を簡単にドブに捨てるなんて」

「税金だからじゃ。所詮は人の金！」

「だから隠そうとしたのか」

「名誉も地位もある人間がなぜ隠さなければならんのじゃ」

「オリパラ組織委員会の理事には金メダルを取ったアスリートがずらりと並んでいるわ」

「そこに至るまでにかんりのしがらみを抱えなければならんかったのじゃろ」

田中が少し得意げな表情をしてから言う。

「しがらみのない生き方の方が気が楽なんだ」

「その代わり得られるものは少ないわ」

「でも努力して手に入れた名誉に傷を付けてそれ以上に多くのモノを失うなんて馬鹿げているなあ」

「回りくどい言い方じゃのう」

田中がポカーンと口を開ける。

「一言で言えば？」

「晩節を汚すというのじゃ」

「理事たちの晩節はまだまだ先ですよ。結構若い理事が多いですよ」

「なるほど。最近寿命が延びたから晩節も長くなっただんじやろ」

ここで山本が少し不満そうに声を上げる。

「破棄された弁当の話をしているのですが……」

「手つかずの弁当が廃棄される。しかも隠して。もうこれは墮落と言うほかないのじゃ。総理もオリパラ担当大臣も何も言わない。かろうじてオリパラ組織委員会は事実を認めたがコメントはしない。暴風雨が収まって頂上が見えれば再び登山しようとしているのじゃ」

「なるほど」

「前にも言いましたが権力者はルールが大好きなのです。もちろんそのルールは国民に対するもの。自分たちには関係ない。それと同じことがオリパラでも行われているわ」

大家も田中もすぐ理解できないような表情をする。

「オリパラのような競技は厳格なルールのうえに成り立っている」

「もちろんじゃ」

『『プレイブック』』といって新型コロナウイルスの対応策をこまごまと規定しているの」

田中がすかさず答える。

「知っている。中でも有名なのがバブル方式」

「なんじゃそれ」

「オリパラ選手や関係者を包み込んで一般市民から隔離するように守ること。そうすることによって感染拡大を避けるというもの」

田中はいったん言葉を切ってから急に何かに気付いたのか興奮して続ける。

「と言うことは、市民はばい菌だと言うことか！」

山本がなだめる。

「こちらから見るとそうだね。それが常識的な見方だね。でも組織委員会から見るとこうなるの」

オリパラ担当大臣や組織委員会の意図を山本が改めて紹介する。

「選手やオリパラ関係者から感染者が出ても市中に感染が広がらないようにすること」
大家も興奮してくる。

「じゃが、チャーター機で来日する選手や関係者はオリパラ組織委員会がその行動を指導できるが、一般旅客者と同じ飛行機で来る場合、感染者が出ると残りの全員が濃厚接触者になるのじゃ、いわゆる縦割りが災いして空港到着後の対応が分かれて以後の感染経路がむやむやになっってしまうぞ」

山本が感心して大家を見つめる。

「そのとおりです！ つまりバブルの崩壊です」

「原因は甘いルールにあるのじゃ」

山本は感動して大家を見つめる。

「大家さんこそ、オリパラ担当大臣にふさわしいわ。いえオリパラ組織委員会の会長も兼任す

べきだわ」

「なるほど！ そうすれば縦割りがなくなる」

田中に続いて山本も連発する。

「なるほど！ なるほど！」

少し時間がたつと興奮が収まって真夏にもかかわらず温度が下がる。

「よくよく考えるとルールというのはスポーツだから厳格だというものではないんだ」

「そうね。どのルールも厳格でなければならぬわね」

「そうでないとルールを守る人がいなくなる」

「ルールは破るためのあるという人もいるくらいだから……」

「法律の網の目をくぐったり、解釈で曲げたり……」

田中と山本の会話が弾む。

「会食は二人までと言うルールを作っても、二人ずつ店に入って中で合流して『してやったり』と大きな顔をする大人がいるわ。まるで子供みたいだね」

「なぜ二人というルールを決めたのか分かっていない……と言うより、二人ずつ入れればOKだと言うような子供だましの手を使うなんて恥ずかしくないのかなあ」

それまで黙っていた大家在目を閉じて呪文を唱えるようにしわがれた声を出す。

「要するに運用の問題じゃ」

すぐ田中が反論する。

「運用の問題なら野放しになってしまおう」

「好きなように行動するわね」

「運用を云々するようなルールはない方がいいのでは」

意外な反論を受けた大家が苦しそうに咳払いする。

「確かにそうじゃのう」

「でも『お願い』じゃなあ。誰も守らないし」

大家が驚く。と言うより議論が純粹に高度化しているのに気づいたからだ。

「田中さんはボヤーとしていることが多いのに時々グスツと突いてくる」

別に酒を飲んで話し合っているのではない。大家のぼろアパートで不思議なテレビの中の山本と三人でウンチクを重ねているだけだ。本道というものがあれば数々の脇道もあるが、三人はしっかりと目的地を失わずに歩いている。もちろんその脇道を楽しんでそこで休憩することもある。

ボケという点からすると大家が筆頭のはずだが田中のボケもすごい。そして芝居なのかも知れないが山本も時々ボケる。ボケは精神面でのオアシスかも知れない。

「ルールを作って魂入れずじゃのう」

まず田中が反応する。

「なるほど」

すると今度は山本が大家の言葉に枝葉を付ける。

「運用の仕方がその場のしぎばかりで始めにわかりやすい説明をせずに形容詞ばかり並べるので信頼されなくなって共感も得られなくなるのだから」

大家が唸る。

「なるほど。運用が言い訳に使われておるのじゃ」

「なるほど。やっぱりオリパラ競技のルールのようにきちっと守るべきなんだ」

「なるほど。アスリートはルールを破らない。審判に絶対文句は言わないわ」

「なるほど。今はオリパラの風呂敷に包まれているが、風呂敷が解かれたら中身はボロボロと言うことにならないようにしてもらいたいものじゃ」

今度は田中も山本も黙る。

『なるほど』と言えんのじゃな」

第十八章 スポーツはルール厳守

第十八章 スポーツはルール厳守